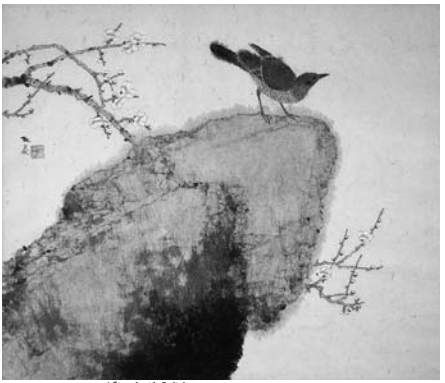


平成22年度展覧会のご案内

展覧会名	開催期間
1 日光×会津 小杉放菴と喜多方美術倶楽部の人びと	4月17日(土)～5月30日(日)
2 自然@美術 小杉放菴の自然へのいつくしみ I	6月5日(土) ～7月19日(月・祝)
3 挿絵≡日本画 高島華宵の大正イマジユイ	7月24日(土)～9月12日(日)
4 一体感醸成事業 日光市所蔵の版画・工芸	9月18日(土)～10月17日(日)
5 栃木の南画Ⅱ 大山魯牛	10月23日(土)～12月12日(日)
6 selection2011 小杉放菴と木村 莊 八	12月18日(土) ～平成23年2月13日(日)
7 出合いの美術Ⅱ 絵画を楽しむエトセトラ	平成23年2月19日(土) ～4月3日(日)

開館時間：午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日：毎週月曜日(祝日の場合は開館し、翌日を休館)
○年末休館12月27日～31日、年始休館1月4日～6日
○展覧会番号1・2・3・5は会期中無休
入館料：一般…700(300)円、大学・高校生…500(200)円、小中学生…無料
※()内は市民割引券を利用した際の料金です。



小杉放菴「梅花遊禽」紙本着色
56.0cm×66.0cm

KOSUGI HOAN
MUSEUM OF ART,
NIKKO
小杉放菴記念日光美術館

日光市の文化財 35

高原磁石石

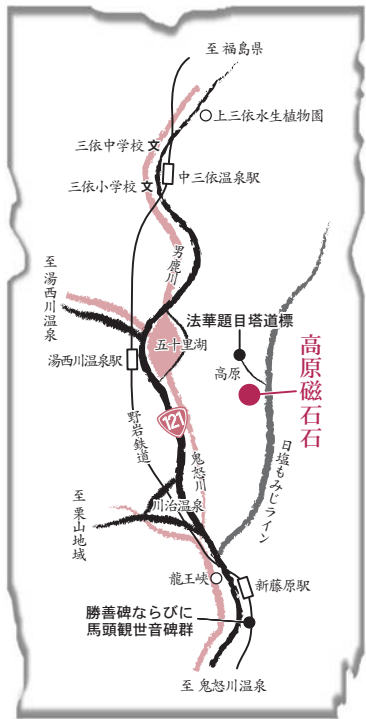


【種別】 史跡
【所在】 日光市高原新田
昭和48年2月16日旧藤原町指定

高原磁石石は、高原新田集落のはずれの原野にある岩で、磁気を帯びていることが名称の由来となっている。

江戸時代の高原新田は、会津西街道の宿駅であったため、村民は人馬の宿料や駄賃かせぎ(馬の背に荷物や人を乗せて運ぶ仕事)などを主な収入としてきました。しかし、高原新田と五十里との間にある高原峠は、会津西街道最大の難所として知られていました。そのため、幕府は文久三(一八六三)年に、高原新田を経由せずに川治温泉を経由する栃久保新道を敷設しました。これによって、人馬や輸送物資が栃久保新道を通るようになり、高原新田に暮らしていた人々の生活は、大打撃を受けることになりました。

磁石石には、「文久三年下ル」との素朴な文字が刻まれており、住み慣れた高原新田から下山し、新道沿いに移り住まなくてはならなかった住民の愛惜の念がうかがわれます。



市民文芸

川柳 選者 日野原元児

うたた寝のページは午後の風が読み
雪解けの頃に退院する予定 福田恒産
ぬるま湯の毒がじわじわ効いてくる 青木竜雄
霧閉気に吞まれ小さな嘘をつき 手塚貴子
プレゼント抱えて広くなる歩幅 小野口英一郎
テーブルに手紙とにぎり飯がある 藤本美佐子
紅をひく卒寿の母の乙女色 吉新勝夫
福田英子

俳句 選者 須藤火珠男

ぼつぼつと母の面影福寿草 樽谷ムメ
聖人の背中お借りし日向ぼこ 白土武夫
春立つに化粧ふて一寸気取りけり 鈴木キヌ子
立春の光広がる花時計 渡辺ミチ子
歩行器に縋りて拝す初詣 徳本英子
樹の胎動の始まりておる春隣 福田美代子
後になり先になりつつ鳥帰る 池田三夫

短歌 選者 阿久津伸一

屋根の雪いまだに解けずうすき陽に
つらは間は置き筆を落す 根立郷美
六つ上の姉やすらかに逝きし窓雪南
天がにじんで見ゆる 福田きくい
一人住む卒寿の母との旅の日々共に
過ごした時間のまばゆし 関根眞佐子
幽界を出で入る人の影みせて吹雪け
るままだに今日も昏れゆく 名古屋佳子
標語コンクール賞状授与の壇上へ
面映ゆく上る息子に支えられ 北崎 君
春吹雪湯の湖畔に立つ妻の姿はあ
たかも墨絵の如し 高橋忠吉
立春も安全歩行を心がけ寒のもどりの
雪道を行く 湯沢登久栄

作品を募集しています!

川柳・俳句・短歌を募集しています。氏名(ふりがな)、住所、電話番号を明記して、ご応募ください。
応募先及びくわしくは
秘書広報課 広報広聴係
☎(21)5135・FAX(21)5109

辞典に込められた想い

皆さんの家には、辞典や事典(以下、辞典類)がありますか? 普段、辞典類を使うときには、本を開き、すぐに言葉を探すと思いがち。今回は、辞典類の普段気づかない部分をご紹介します。

表紙を開いてページをめくると、ほとんどの辞典類に編集者のあいさつ文(まえがきや序文など)が掲載されています。ここには、辞典類を作った目的や経緯、編集者の信念や使命、読者への期待、執筆者や関係者への感謝、そして辞典類を出版できたことへの喜びなどで満ち溢れています。

例えば、国語辞典の代表格である「広辞苑(岩波書店)」は、昭和30年に第1版が発行され、昭和30年に第6版が発行されています。広辞苑のはじめには、編集代表の新村出氏による、明治時代から始まる編集の経緯な



どを示した「自序」が第1版から引き継がれて掲載されています。それに続いて、新版の編集者による「序」が掲載されています。

また、意外な印象を受けるのが「六法全書(有斐閣)」です。最新版の編集委員によるはしがき(序文)に続き、創刊の昭和23年版の編集責任者のはしがきが掲載されています。最新版のはしがきは、法律の本らしい堅さがあるのに対し、創刊時のはしがきはどこことなく親しみやすさがあります。まるで、これから法律を扱わなければならない読者の肩をもみほぐすかのようです。

皆さんのお手元に辞典類がありましたら、本文以外の部分も読んでみてはいかがでしょうか? あいさつ文のほかに、普段は気づかないページがあるとあります。違った視点から見ると、「便利さ」だけではない辞典類の新たな魅力に気付くかもしれません。